投稿

四川地震（汶川地震）における被災状況および国際支援の効果

札幌医科大学救急集中治療医学講座
助教　丹　野　克　俊
教授　浅　井　康　文

はじめに

四川地震（2008年5月12日発生）では日本をはじめ各国の医療支援が行われたが、急性期には被災状況の正確な把握は難しい。今回、被災状況や支援効果について調査する機会を得たので報告する。

※平成20年度自治体国際協会専門家派遣事業の派遣に伴い許可を得て調査した。

四川地震の概要

四川省アバ・チベット族チャン族自治州汶川県においてマグニチュード8.0の地震が発生し、被災者4,620万人、死者約7万人、行方不明者約2万人という未曾有の災害となった。住居を失った被災者は500万人を数え、今なお復興の途中である。特に学校での子供の死者は9,000人に上るという[1]。

日本からは、中国の要請に基づき国際緊急援助隊のまず救助チームが5月15日に四川省青川県で活動を開始し、続いて5月20日に医療チームが省都の成都市で活動を行った。また、ドイツ、イタリア、ロシア、フランス、イギリスなどの国が医療チームの派遣を行った。

調査方法

発災から4カ月後の現地医療機関の現状と医療支援の効果について、広元市内の病院および近隣地域の視察と関係者からの聞き取り調査を行った。広元市は三国志や史記に記述のある蜀の桟道や剣門関があり、歴史上の要衝となった地域である。四川省北東部に位置し、人口305万人、面積16,314㎢（岩手県と同等）、日本の国際緊急援助隊が同市の青川県、北川県で活動を行いマスコミにも大きく取り上げられた地域である（行政上、市は県の上位にある）。

結　果

調査時点（9月現在）で、広元市の死亡数は4,821人、負傷者数は28,245人。そのうち広元市のA病院には約1,500名（確定数不明）が搬送され、重症者の多くが、成都市、深圳市（広東省）などに転送された。死亡は4名とされているが、全て同院搬入前に死亡確認された。同地域では国際医療支援として、5月16日から19日にかけて広元市青川県関庄鎮および喬庄鎮で日本の国際緊急援助隊救助チームが活動し、また、5月25日から6月4日にかけてフランス医療チームが広元市のA病院で活動した（**写真1**）。ともに高い評価を受けていた。震災から4カ月を経た調査時にもまだ余震が続いていた。病院施設の補修は行わ

写真1　フランスチームの活動（現地の病院より写真提供）

写真2　病院の手術室器材庫。損傷部を補修した痕がある

れていたがさらなる補修が必要と思われた(**写真2**)。青川県ではまだ粉塵が多いとのことであった。テントや仮設住宅が設置されたままであったが、大部分の住民はそれを臨時の避難場所として使用していた(**写真3**)。

写真3-A　被災地のテント。この地域では現在住民は住んではいない。余震に備えて設置したままとのことであった

写真3-B　プレハブの仮設住宅（写真右）

写真3-C　プレハブの内部。このプレハブでは炊事が可能ではなかった

考　察

四川地震の被害は単独の地震災害としては類を見ない範囲と被災者数であり、社会に大きな衝撃を与えた。他国からの援助に関しては当初、中国政府がその必要性を示さなかったが、被災の大きさや世界各国の関心の高まりから、地震から数日を経て医療チームの援助などを受け入れることとなった。しかし、報道を見る限り、早期から人民解放軍による被災者の広域搬送を行い、ある意味、規律を持って防疫や病院搬送などの活動を行っていた。はたして日本でこれほどの規模で同様の活動ができるかは疑問であり、今後の日本の災害医療体制にとっても参考になると思われた。また、国際緊急援助隊の活動報告によれば、四川省の省都の成都市では、医療的にも十分な余力を感じたようである。それにもかかわらず他国の支援を受け、共同して医療活動を行うことができたことは、両国にとって非常に意義のあることと考える。

一般に災害時には救援が早ければ早いほど効果的といわれる。もちろん医療効果としては早期介入が重要であることは論を待たないが、他国に対する日本のプレゼンスを示す上では決してそれだけではない。フランス医療チームは災害発生から約2週間後に広元市での支援を開始しているが、中国では各種メディアを通して感謝の意を表しており、市民の意識も同様に感じ取れた。日本の緊急支援として、無償資金協力に4億4千万円、緊急援助物資に6千万円の供与が実施されているが、このことはあまり知られていないようであった。やはり、救助チームや医療チームによる人的な援助が一番記憶に残っていた。よって多少の適切な時期を越えたとしても人的支援を行う意義は十分にあると考えられる。

おわりに

今回の調査内容には限界があったが、国際医療支援についてさまざまな立場の方からの感謝の声を聞いた。これは人的支援やその活動内容が十分に評価されたものと理解できる。引き続きシームレスな活動を行うことで両国の関係が発展することを期待する。

文　献

1) Zhang L, Li H, Carlton JR, Ursano R. The injury profile after the 2008 earthquakes in China. Injury. 2008 Dec 29. [Epub ahead of print]